

## ブレヒトの『小市民の結婚式』について

友 永 輝比古

**要旨** 1919年作の『小市民の結婚式』（茶番劇）は上演して成功すると思えるような作品ではありません。同じ年に書かれた『夜打つ太鼓』が1922年にクライスト賞を受賞し、何度も上演されましたが、それと比べると目立たない作品です。しかし、21歳の大学生ブレヒトが、小市民の無思想にして無内容な生き方に疑問を感じて、その俗物性と精神的墮落を暴露したことに、驚きを感じます。そればかりか、単なる暴露劇ではなくて、小市民の俗物性を笑いの対象にしたところに、この作品の良さがあります。ブレヒトは資産家の息子ですから、自ら笑いながら小市民層と決別した、と言えるかも知れません。彼が大学時代を過ごした当時のドイツの社会情勢を概観するなかで、この作品を考えてみたいと思います。

## 小市民の俗物性批判

1919年に書かれた『小市民の結婚式』は、結婚式のパーティーが始まり、それが終わるまでのお笑い茶番劇です。その都度その都度場をしらけさせる計算されたセリフのやり取りとか、大道具、小道具がすべて壊れてしまうなどは、当時としては斬新であったでしょうが、本当に心底から観客を笑わせ、観た後「楽しかった。よかったね。」と言わせたかどうか、また、言わせるかどうかは怪しいと言わざるを得ません。事実、この作品は1926年に上演され、第2次世界大戦後にも時折舞台にかかりましたが、好評を博したという記録はありませんし、それ以降上演されていません。日本での上演記録もありません。

しかし、この作品を読むと、劇作家としてはまだまだ駆け出しの21歳の青年ブレヒトが、これほどまでに小市民（中流層）の実態、その俗物性、精神的荒廃をみごとに暴いたという点で、しかもそれを批判の対象かつ笑いの対象にしたという点で、ブレヒトの視点・姿勢に感心させられます。

したがって、舞台に乗せて成功したかどうか、成功するかどうかは別にして、作品そのものは失敗作とは言い切れないものがあります。お客さんを笑わせるプロの吉本新喜劇あたりがこれを脚色あるいは翻案すると、案外面白い作品になるかも知れない、という気はします。

さて、登場人物は新郎新婦、新郎の母、新婦の父、新婦の妹、新婦の女友達とその夫、新郎の男友達と若い男の9人。パーティー会場は新郎新婦の新居。ソファ、テーブル、椅子、戸棚、ドア、ベッドはすべて新郎の手作り（自給自足）である。材木を張り合わせる膠も自家製。パーティーに集まった連中は、誰一人として分別、教養らしきものは持っていない。話題は途切れ途切れになりながらも次々と移るが、結婚式という目出度い祝い事を楽しく盛り上げるどころか、話す中身は無内容・空疎で、自制心もなく互いに傷つけ合うか、場をしらけさせるかである。要するにばらばらの存在の集まりである。時の経過とともに、新婚夫婦が世界にひと

つかないと言って自慢した手作りの家具は壊れていく。やがて家中に振り撒かれていたオー・デ・コロンの香りが消え、自家製膠の悪臭が漂う中、さんざん食べるだけ食べた客たちは、新郎新婦に面と向かって悪口をたたいて帰っていく。残った新郎新婦は喧嘩をするが、本能が勝って、開かない寝室の手作りドアを壊して中に入る。ベッドが潰れる音で落ちとなる。

新婦の父はくだらない話を得意とする饒舌家で、その時々話題に引っかけて話をしかけると、たちまち誰や彼やが別の話題を出してそれを中断させようとする。それでも父は喋るのだが、話しは話題から逸れ、話し終わった後は決まって場がしらける。たとえば、食卓に鱈が出されると、かつて伯父が魚を食べているときに骨を飲み込み、苦しんだあげくゲロをテーブルに吐いてしまったと言う。それを聞いて、誰も鱈を食べる気がなくなる。ワインを飲んですべてを「水に流そう」と新郎が言うと、水洗便所の話をする。万事がこの調子である。

新郎の母は、息子が一人前になったにもかかわらず、まだまだ子離れができていない息子溺愛型の母である。せっせと料理を運んでは、他の誰でもないただ息子に向かってだけ語りかける。それが魚の時は「尾っぽの方をお食べ」、「もう一切れお食べ」、「おいしいかい」と、生クリームつきのプディングの時は「ここをお取り」と言う。息子には一番いいところを食べさせようとするのである。

新婦の女友達は、家具一つひとつに難癖をつけ、新婦と言い争いになる。その度に女友達の夫は妻のはしたなさを恐る恐る制止しようとするが、妻も負けてはいない。逆に夫をやり込める。我慢できなくなった夫は、ついに人前で自分の妻をなじる。この夫も分別があるかと言えばそうではない。若い男が結婚式の祝辞を流暢に述べて、皆から褒められたときには、「結婚式祝辞集の85ページを暗記したのさ」と、言わなくても良い一言を言って、妻にたしなめられる。

新婦は既に身重で、新郎は彼女の前にいかがわしい所で学習済みである。そんな二人は場を盛り上げるためのダンスの時に、新郎新婦がペアで踊る仕来りに反して、新郎は新婦の女友達と踊り、新婦は新郎の男友達と激しくエロチックな踊りを見せる。

男友達が結婚を祝して歌う歌は、出来ちゃった結婚の新郎新婦を当て擦った男と女の卑猥な歌である。この歌の間に新婦の妹と若い男はどこやらにふけ、お楽しみ。やがて顔を赤くして戻ってくる。

ブレヒトは、こういった無分別で無教養な人物、いわゆる否定的人物だけを集めたひとつの世界、ばらばらの孤立した人間関係で成り立つ嘘っこの世界（でも、ありうる世界）を描いています。そこには肯定的な人物はまったくいません。否定的人物、いわゆる俗物を生真面目に批判するのではなくて、笑いの対象としたところに、青年ブレヒトの精神的余裕が感じ取れ、そこに作品の良さがあるように思えます。観客を笑わせる手段としては、家具が壊れたり、壊れた家具に服が引っかかって破れてしまうなどの茶番的要素は別にして、人物の会話において、ブレヒトは漫才的な笑いの手法を採り入れています。ブレヒトは観客を笑わせると同時に、孤立化した無内容な人間の無内容な生き方の滑稽さを観て取らせようとしたのかも知れません。父親のセリフ、「わしはいつも思っとるんだが、話をするときには、誰にも関係のない話をする方がいいんだ。皆が好き勝手にしゃべったら、たちまち喧嘩になってしまう。」が孤立化を象徴的に表しています。

ところで、ジャンルは違いますが、プレヒトが対象にした小市民よりももっと下層の、言わば社会の掃き溜めのような所に生きている人々をテーマにした映画があります。黒澤明の『どん底』です。ゴーリキー原作を日本の土に移し植えたものですが、完全に日本の土壌から生まれた日本の『どん底』になっています。原作はロシア革命の前のでき、黒澤の映画は朝鮮戦争後で、戦争のおかげでまだ景気が続いていた時代の作品です。映画の人物たちは互いに口汚く激しく罵り合い、相手の夢を潰します。しかし、その影には、いつかこんな逃れようのない掃き溜めから出て行って、人間らしい生活をしたい、という切望があります。黒澤明は経済繁栄に浮かれる時代に対して、人間が生きるとはどういうことなのかを対峙させたのかも知れません。掃き溜めの人たちの罵詈雑言を時にほほ笑ましくも滑稽に思うのは、その裏にある生きることへの執着、エネルギーが感じ取れるからでしょう。『小市民の結婚』の人たちも互いに悪口を言い合いますが、プレヒトはその裏にある彼らの無意味な生き様を暴露したと言えます。

数年前に、『どん底』を自ら演出し舞台に立った仲代達矢が公演用チラシに次のようなことばを書いています。

“貧しかった時代よりも もっと厳しい貧困の中に  
現代人はいるのだ” と云った人が居る。  
言葉の貧しさ 思考の単純さ  
観念が 理性が失われ、  
むき出しの感情だけが  
肥大してゆく…  
そして何より飽食の中で  
切望を失った、と。

「どん底」の人間たちは、ひとり残らず  
切望している 激しく…  
底辺の吹き溜まりにうごめく  
人間たちの哀しさ、可笑しさ…  
彼らは叫ぶ “人間とは何だ!!”

仲代達也は、「言葉の貧しさ 思考の単純さ／観念が 理性が失われ、／むき出しの感情だけが／肥大してゆく…／そして何より飽食の中で／切望を失った」現代市民に対する、その精神的貧困に対するアンチテーゼとして、『どん底』を上演しました。彼のことは、プレヒトの『小市民の結婚』の人間たちに、そっくりそのまま当てはまります。ということは、プレヒトが観察した約80年前の小市民の姿は、現代もなお生きているということになります。

## 20歳前後のプレヒトと社会

プレヒトは、1912年に14歳で『友情のバラード』を「新メルクール」誌に載せ、第1次世界大戦中の1915年に、作文で戦争を賛美する課題を与えられたとき、ヴィルヘルム帝国に順

応じた教師の権威に抵抗し、祖国のための戦死を美化することに対して距離を置き、疑問視する作文を書いて、学内問題になりました。まだ17歳でした。彼はそのころから体制に対して批判的な目を持っていました。その目は、世の中を斜に観て批判しているつもりになり、実際には何もしない保身的で無責任な連中の目とは全く違います。そのことは、彼が新しい時代における演劇の役割を自分流に見極めていったことでもはっきりしています。その目は、社会変革の激動期に入って、社会、集団と個人、歴史の動きと個人の関係を見る目へと研ぎ澄まされていきます。

ブレヒトが青春を過ごした時代は、誰もがナチス・ファシズムに突入していくとは思っていませんでした。『小市民の結婚式』が書かれた1919年の前年11月、ドイツ国民の多数は第1次世界大戦の敗北によって既成の権威を疑い、ヴィルヘルム治世に対する不満を強め、その結果王は退位し、ドイツ史上初めて社会主義政党的政権が誕生しました（社会民主党と独立社会民主党の連立）。ブレヒトが医学を学んでいたミュンヘンでも、バイエルン王はヴィルヘルムよりも早く退位しました。各州で革命政権が生まれ、ドイツは全く新しい時代に入った訳ですが、なんのビジョンもなく激動激変の時代に入ったと言えます。

1918年11月、平和裏に革命が成功し、社会民主党と独立民主党の連立政府は、施政方針として社会主義政策をとることを宣言し、労働者の人権を守る8時間労働制、失業者対策等を打ち出しましたが、実績をとまなうものではありませんでした。政治の舞台では、前者の党は議会主義を主張し、後者は暴力革命を信念とし、ことあるごとに対立し互いに政治の主導権争いを繰り返していました。以前から社会主義勢力に内在していた民主主義と暴力革命の問題は、同勢力が政権を掌握してから顕在化し、その後のブレヒトの作品『母』、『カラルおかみさんの銃』に反映することになります。

1919年1月、プロイセン政府の人事に関する問題が社会主義政党的の間で起き、それがきっかけとなって、不安定な社会的・経済的生活に不満を持った労働者がベルリンで20万人の大デモをおこないました（日本で普通選挙を求めて史上初の大会・大デモがおこなわれたのは3月）。「スパルタクス団の蜂起」と言われているものですが、それは悲惨な結末で終わることになりました。警視庁の建物を占拠した労働者に対して、政府は軍に掃討戦をおこなわせ、逃げる者も捕虜になった者も射殺されました。この事件を題材にして、ブレヒトは戯曲『夜打つ太鼓』（最初の題は『スパルタクス』）を書いています。筋は、帰還兵は戦場から許婚のもとに戻ってみると、彼女は留守中に別の男の子どもを孕んでいることを知り、革命をとるか女をとるかで、結局街に起こっている革命に背を向けて彼女と寝るといふものです。この作品のなかでも批判の対象にされているのはやはり小市民（商人）です。同じ年の3月から4月にかけて各地で起こったストライキは、労働者が軍隊に殺傷されるという結末で終わり、ブレヒトが居たミュンヘンに共産党政権が生まれたときも中央政府は武力で弾圧し、共産党も人質を銃殺刑にしたとのことです。

青年ブレヒトは、20歳前後を血で血を洗う激動期のなかで過ごしなが、全体として斬新な変革を求める時代の雰囲気にも影響されて、一晚の慰みとしての演劇ではなく、既成の枠

を破る新しい時代の新しい演劇を模索していたのだと思います。彼自身は資産家の息子でしたから、『小市民の結婚式』は、激変状況にも拘わらず無思想・無内容な階層の人々を嘲り笑うことで、自身の階層からの決別を意味していたのかも知れません。ブレヒトが本格的に経済学の勉強をするのは数年後のことでした。

#### 参考文献

Bertolt Brecht, "Die Hochzeit", in Bertolt Brecht Große Kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe Bd. 1 Stücke 1 (Frankfurter am Main: Suhrkamp Verlag, 1989)

Jan Knopf, "BRECHT HANDBUCH Theater" (J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung Stuttgart, 1986)

ブレヒト著, 岩淵達治訳『[小市民]の結婚式』, ブレヒト戯曲全集第8巻(未来社, 1999)

マリアンネ・ケスティン著, 内垣啓一・宮下啓三共訳『ブレヒト』, ロロロ・モノグラフィー叢書(理想社, 1971)

林健太郎著, 『ワイマル共和国』, 中公新書 27 (中央公論社, 1963)

木村靖二著, 『両世界大戦と現代の暗転』, 木村靖二編, 「ドイツ史」(山川出版社, 2001)